

# ドリーム通信

2019年  
3月6日発行  
第95号  
山形県スポーツタレント  
発掘事業実行委員会

## 今年度のU12 キッズキャンプを振り返って ～①スポーツを通じた学び、本物から学ぶ～

U12では、1泊2日の合宿形式のキャンプを年5回行い、様々な運動能力育成プログラムと知的能力育成プログラムを実施しました。特に今年度は、平昌オリンピックに出場した本県に縁のあるスズ正樹選手（スノーボードアルペン）、一戸誠太郎選手（スピードスケート）、ウィリアムソン師円選手（スピードスケート）の3名から講話をいただきました。その中で“挑戦”“継続”“感謝”といったアスリートとして大事なことを学ぶことができました。また、運動能力育成プログラムは、本県出身の曲山紫乃選手（水球）をはじめ、和田武真コーチ（フェンシング）、村田互監督（ラグビー）、早野みさきコーチ（ホッケー）、渡邊光昭コーチ（体操）、鈴木拓也監督（フットサル）、成山悟史コーチ（ライフル射撃）と7競技の日本代表選手やコーチ、元日本代表の経歴を持つ一流の方々から、それぞれの競技の楽しさや魅力を伝えていただくとともに、体験したキッズ一人ひとりの評価もいただきました。



### 各キャンプのテーマ

第1回『TEAM』 第2回『勝負』 第3回『自分の中にコーチを育てる』  
第4回『攻める』 第5回『自分の可能性を本気で探る』

各キャンプでは、毎回テーマを設け、仙台大学と連携したスポーツ教育プログラムを行っています。今年度は、“ユースオリンピック”について学んだり、アスリートに必要な表現力の向上に取り組んだりしながら、自分の強みや弱みについても分析しました。また、1期生が大学1年生となり、国体やインターハイ等で活躍した修了生をプログラムの講師として保護者と共に招くことができました。ドリームキッズで何を学び、何を悩んだのか、親としてどんなサポートをしてきたかといった等身大の言葉を聞くことができたことは、保護者にとって大きな刺激やヒントを得た貴重な時間になりました。

全体を通して、U12の課題は“積極性”でした。運動能力の高さは、どの講師にも高評価をいただくものの、自ら質問したり、チャンスを自ら貪欲に掴み取ろうとしたりする姿勢がまだまだ足りないようです。講師や修了生が感じ取った世界で戦うアスリートの資質や雰囲気からキッズの背中を押してきていました。スポーツに必要な能力はキャンプ中に培われるわけではありません。キャンプでの学びを学校や日常生活、スポ少やクラブで実践してこそ自分のものになります。その一つひとつの行動の先に“世界に挑戦し続けるアスリート”があるものと信じています。

山形から世界へ！ FUTURE IS YOURS！



## ～②自己分析、そして競技選択～

数多くのオリンピック種目の中で、一般の小学生が経験する種目は3割程度、中学校の部活動においても4割程度で、残りの6割の種目とは出会うことはありません。ドリームキッズでは、その6割の種目にも目を向け、講師の方々からの評価と自分自身の感触を基に競技種目の絞り込みを行います。現在行っている種目を大事にしながらも、新たに出会ったスポーツに可能性を感じた場合は、スケジュールを調整し、シーズンオフの間に経験を積んだり、大会に出場したりしながら、自分の可能性を様々な角度から探っています。今年度の最後のキャンプでは、1年間の活動を振り返りつつ、親子で自分の適性を分析しながら、メインで取り組む競技と自分の可能性を探っていく競技を2～3種目程度に絞り込みました。



一般的に種目転向をする大きなきっかけとして、中学入学や高校入学など環境が変化することがあげられます。ドリームキッズも例外ではなく、選択に迫られます。ここで大事にしていることは『そこに意志はあるのか？』ということです。様々な種目体験やオリンピックの言葉に刺激を受け、何を感じ、何を考えたか、どう自分と向き合ったのかを、まずは一番近くで支えてくれている保護者へ自分の言葉で伝えることが大事だと考えています。今後、アスリートとしてメディアへ発信したり、関わる人が増えたりしていく中で自分の事を表現することは大事なスキルだと考えています。小さな挑戦を続けていく先に大きな舞台が待っていることを、トップアスリートやトップコーチ、修了生から学んだドリームキッズだからこそ、たどり着ける素晴らしい未来があると信じています。

“世界に挑戦し続けるアスリート”



一問い合わせ先—  
山形県スポーツタレント発掘事業実行委員会事務局  
990-2412 山形市松山二丁目11番30号  
TEL:023-615-6415 FAX:023-615-7933  
ホームページ: <http://www.y-dreamkids.jp/>